

こで作り手が不可や奨励不奨励などの規範性を發揮するのはまったく場違いな話である。本版ではそういう色彩が消失しないまでも、ずっと薄らいだのは大いに結構なことだと思う。

筆者は本版をまだ時間をかけて使い込んだわけではないが、この歓迎すべき版を使用する上で注意すべき点、気付いた点などについて、二、三を以下に挙げておきたい。

まずこの辞書はもっぱら米国流の綴りに従っていて、英国流の表記は無視している。また解剖学名には(物質名もだが)省略されているものもひじょうに多い。さらに略語は、ぶつう略称で呼ばれているものごとく一部(BCG, AIDS, SMON, A-V block など)が見出し語に採用されているに過ぎない。

カタカナ語の長音表記は使用される分野の傾向にも影響されるわけだが、この辞書ではコンピュータ、スキヤナ、ドライヤ、ネブライザ、レスピレータなどは語尾に長音符がなく、インレー、アレルギー、カタレプシーなどはあり、サンブラ、モニタ、ジストロフィ、クロマトグラフィ、ファクタなどの語尾の長音符はあってもなくてもよいことになっている。語中のもではパターンは長音符あり、ポリープではどちらでもよいとなっている。

この辞書には中学一年で教わるような単語もかなり入っているが、無駄なものも多い。wの部でいうと、ただ「弱い」という訳語だけ付けた weak などはその例で、window, winter, wish, wood, wool などと同様である。これに反して、「痰を伴う」という意味のある wet などにはもっとしっかり説明も付けて載せてよいものであろう。また、waste には「消耗した」という形容詞だ

けが付いているが、「廃棄物」「老廃物」という名詞の意味も重要なはずである。

ちなみに、旧版になくて本版で入った語には、CNS, Cowper's gland, day blindness, hippocampus, lumbical などがある。旧版にあって本版になかったのは、stye (麦粒腫)、tunica, unstriated muscle, chiblain (しもやけ)。ただし、旧版見出しは誤綴)などで、旧版・本版ともになかったのは earlobe (耳朶)、Snel-len's chart (視力表) のようなものであった。

本版での改善事項を重視したために、おのずから旧版に対して厳しくなったが、時間的制約の中で本版を完成された草間悟委員長をはじめとする現委員会に敬意を表するとともに、コンピュータ化小委員会を設けるなどして本版の基盤を推進整備された旧委員会の功績も銘記しておきたい。

(三輪 卓爾)

〔南山堂・〒一三東京都文京区湯島四一—一〇三—
五六八九—八八五〇、A 5 版・一五八七頁・一九九一年四月
・一二、三六〇円(税と別)〕

谷津三雄・森山徳長・本間邦則共訳

マルヴィン・イ・リング (Malvin E. Ring) 原著

『図説 歯科医学の歴史』(Dentistry An Illustrated History)

原著者は現在ニューヨーク州立大学歯学部で歯学史、文献学、及び図書館学を教える傍らアメリカ歯科医史学会の機関誌 (Bulletin of the History of Dentistry) の編集者として該誌を世界で最も権威ある歯学史の専門誌とした功労者である。

歯学史 (DDS) のほか文学士 (BA)、図書館学修士 (FACD) で、それに歯科医事史料を求めて全世界を駆け歩き蒐集した豊富な資料によって編述されたのが、この原著である。

一九八五年、Harry N. Abrams (アメリカ) から出版されたのであるが、原著者と親交のあった故本間邦則 (日本歯科大学新潟歯学部講師)、森山徳長 (東京歯科大学講師)、谷津三雄 (日本歯科大学松戸歯学部教授、日本歯科医史学会理事長) という日本歯科医史研究の第一人者がその翻訳を担当されたものである。

翻訳者の一人本間邦則 (日本歯科医史学会理事、日本医史学会評議員) 氏は病床で翻訳を続けられたのであるが、平成二年十月十二日、本書の完訳出版を待たず五十八歳の生涯を閉じられたのは痛恨の極みである。

野性の動物は歯牙が駄目になると死が訪れる。生存を維持する食物を獲得することができなくなるからである。人類は歯の異常に対して処置することが出来、食物を集めることの出来ない者に運搬補給してやること、食物を加工することによって生命を長らえる知恵を持っている。また歯の異常に対する処置の歴史は、歯が硬組織なるが故にその保存状況が他の身体器官に比べて良好であり、歯学史の研究対象としては先史時代から系統的に追求してゆける器官である。本書は美しい原色図版によって原始の世界

から現代まで飽きることなく歯科の歴史を説得力ある解説とともによく理解させてくれ、楽しく構成されている。

原始の世界における歯に関する民俗学的な変遷について、第一章の「前コロンブス時代のアメリカ」から記述しはじめ、マヤ人、インカ人、北米インディアンへと伝承された習俗を現代における非工業化社会に至るまで追求し、紹介しているので、親しみながら読みついでゆくことができる。ついで古代中近東地方のメソポタミアからフェニキア人、ユダヤ人、エジプト人による文化圏での歯科史的な遺物に言及しながら、古典期の世界、ギリシャ、エトルリアの遺習、そしてローマ時代における歯科医の守護神、聖アポロニアという治癒神が初期キリスト教の中に出現してくる経緯について興味ある図説が行われている。イスラム世界について極東の歯科に関係ある宗教的、芸術的な文化遺産について、従来の歯科学史成書よりも、実地調査をふまえての切込みある図説は注目に価する。

インドに関する項ではバートル寺院の抜歯彫刻、スリランカでは仏牙寺とその由来も紹介されている。中国について日本については「病の草紙」を初め、一五三八年に亡くなった尼僧仏姫こと中岡テイの上顎用総義歯(ツゲの木製) およびその遺品が収載されている。その他、お歯黒染め、歯揚子、および抜歯の美しい浮世絵が図説されている。これらの資料は前記三人の日本語版翻訳者の協力によって充足することができたものであり、外国語版の類書に見られない特徴の一つとなっている。第七章は中世後期の西ヨーロッパ(十三―十六世紀)の歯科事情、第八章ルネッサン

スは解剖学的知識の進歩に伴ない歯科の処置が外科医によって取り込まれ、リフ (Warter H. Ryff) の『創傷外科全集』に収載の歯科器具、パレ (Ambroise Pare) の『外科全集』に見られる抜歯鉗子、義歯、補綴装置など、それらは実用の医学として成立する歯科の成長過程を図説している。第九章十七世紀ヨーロッパの項では近世科学の確立が医療全般に及ぼした影響により、専門医業としての歯科と学術としての歯科学の発展をうがすことを図説する。第十章の十八世紀ではフランスのピエール・フォンシャールによる歯科学の確立からドイツ・イギリスへの歯科学に及ぼした影響と、歯科補綴学の成立が系統的に図説されている。

第十一章はアメリカにおける開拓期から十九世紀中ばまでの歯科学的史実を系統だて、一八〇〇年から一八四〇年まで、世界の歯科をリードしたアメリカの歯科についてカリカチュアを交えて、図説。第十二章はウエルズとモートンによる麻酔の開発が歯科治療のみならず、全世界の医学に偉大な貢献を確立してゆく経過が説得力ある図譜によって飾られている。ことに一八四六年十月十七日エーテル麻酔のもとに行われた第二回手術にあたって撮られたモートンと外科医ウオーレンが写っている銀板写真は、「エーテルの日」という油絵に幻惑されてきた目にはそのリアルな新鮮さと臨場感にひたることのできる。第十三章は二十世紀の近代化し、世界の歯科界を先導してゆくアメリカ歯科医教育、歯科学研究、歯科界の組織形成を豊富な資料によって系統的に図説している。末尾の文献も広範囲に蒐集されており、このわかり易い図説を跳躍台としてより精しく研究をおし進めようとする人たちにと

って極めて親切に整理されている。

図説であるために歯科専門に外の人々にとって、あまり抵抗なく各項目を追ってゆくことができるのは、日本語版の翻訳者たちの歯科学史研究キャリアと優れた語学力の然らしむるものである。その努力に対して深く敬意を表したい。原始時代から現代に至る医学の専門分野の大きな流れを知ることが、本書の序文に引用されているアメリカ歯学史学会の創立者であるベン・ロビンソン博士の「歯科医が歴史的な背景を知らないかぎり、その苦勞、永久的な悪条件、真の目的からの逸脱は続くであろう」という警告に對し、より謙虚で、学究的な姿勢であらねばならぬことを理解し、行動する専門分野の人々にとって本書は必要である。過去の理解のためにこの美しい図説書は最もふさわしい。

「過去を振り返ることは将来に對して責任を担うことである」とはローマ法王ヨハネ・パウロ二世の言葉である。また「過去に目をつぶることは現在に盲目である」と言うハイッデッカー西ドイツ大統領の発言を借りるまでもなく、歯科学の現状に盲目とならぬためにも、研究者、臨床家、歯科医、一般医家を問わず座右に置いて然るべき書である。

(蒲原 宏)

〔西村書店・千九五一新潟市旭町通一―七五四―三九〇〕二五
―二二三―二三八八、B4変形判・三二〇頁・図版三〇四・
定価二八、八四〇円(税込)